



**「しこぶちさん」のむかしばなし**

むかしむかし…朽木村のいかだ師「しこぶちさん」が、山から切り出した木をいかにだに組んで舟子と川を下っていると、龍が目のそばさみというところで、舟のかたにあたって立ち止まってしまう。「これは困った…」ふと気づくと、そこに乗っていた舟子の姿が見当たりません。川に覗きやると、一匹のカップが舟子を小皿にかかえて、川底にひきいれようとしているではありませんか。「おまえはだれや!」「わしは、人の生き血を吸って生きてる、カップの川太郎や」「しこぶちさん」は舟子をお救おうと、早でカップの川太郎を驚かしめ、大事な頭を割ってしまいます。「これからは、もうしまへん」カップの川太郎は、すぐごと運載します。いったんは、しおらしくあやまったカップの川太郎でしたが、「しこぶち」さんが中野の森かべというところへ下ってきたとき、ふたたび川底からいかだをおさえて航行を邪魔します。かんかんに船った「しこぶちさん」は、カップの川太郎を尻尾なきまで打ちめします。「壊れしてください。これからは骨堂にガマの脚舟をはいて、舟奥の舟を持っているいかだ師さんには手を出しません」その誓いのしるしに、持っていた枝の数をさかさにとまき出します。「しこぶちさん」は裏れに帰って、カップの川太郎を許してやります。その運きに上てた杉の木から枝が出て、安曇川町・中野の大きな「さかさ杉」になったという話です。「川のワルモノを運治してくれる縁い神さま」として、川沿いのお宮さんに祀られるようになったということです。

『読みがたり 読者のむかし話』(読者小学校教育研究会編、日本標準発行)から要約

## 安曇川と人の暮らし

### 1. 川のもつ2つの顔 - 治水と利水 -

安曇川は自然河川の姿を比較的よく残す川だといわれますが、それだけに一たん洪水になると猛威をふるうことになります。人々は長年にわたり堤防・堰堤・護岸壁などを構築し、河川改修を行なって集落を守ってきました。一方、ふだんの穏やかな川は、私たちに多くの恵みを与えてくれます。昔の人々は、河川に「筏通し」のある木造の井堰(かつては「ドンド」と呼ばれた)を設置して、生活用水や田用水を確保しました。安曇川では大正時代以降に、大津市葛川と高島市朽木地区内に3か所のダムと発電所が設置され、生活の近代化に貢献することとなりました。戦後はコンクリート製の洪水調節ダムや砂防ダムを設置して水害を防止したり、農業用水を確保するために多くの頭首工(井堰)を設置してきました。表の地図に記されたものだけでも約60か所になります。

### 2. 人のくらしと川魚

安曇川にはイwana・アユ・ウナギ・コイなど多種類の川魚が棲息し、時にはドマスを産卵のために遡上できます。自動車道が整備され、新鮮な海魚が日常的に食べられるようになるまでは、山村に生活する人々にとって川魚は貴重な栄養源でした。村人の多くは、親や近所の年長者から伝授された川漁に精通していて、趣味と実益をかねて大川通いをしました。また、子どもたちにとっても、川はまたとない遊び場であり、水泳や魚捕りで楽しい時を過ごしました。しかし、近年は川魚の個体数の著しい減少のみならず、絶滅が危惧される魚種が増えました。原因としては、気候の変動や人為的な貧栄養化が考えられます。他には、魚道の設置されていない堰堤や設置されていても機能していない堰堤がほとんどで、川魚の生態系に悪影響を及ぼしています。今こそ、早期の改善対策が望まれます。

## 神さまに見守られた木材 シコブチ神と筏流し

安曇川沿いには、「シコブチ」という名前の付く神社が15社、神社跡が2社、そして講が2つあります。「シコブチ」は、思子淵、志子淵など、色々な漢字が当てられています。本来、「シコ」は「恐ろしい・醜い」、「ブチ」は川の屈曲部や淵。つまり、川の流れが安定しない、危ない場所を意味しています。この恐ろしい「シコブチ」が名前に付く神社ですが、実は、安曇川の筏流しを見守る神さまがおられ、危険を伴う筏流しが無事に山から河口までたどり着くように、その安全な航行を見守って下さっていたといわれています。

これらの神社は安曇川の源流の1つである大原大見から一番下流は安曇川町中野までの、安曇川流域山間部に分布しています。それはまさに、筏乗り(筏師)にとって、河川を下するときの難所が多かったところ。そんな地域のあちこちで、筏乗りを見守っていたシコブチの神さまは、同時に材木流通の守護神ともいえるでしょう。筏流しは滋賀県内外の多くの河川でも見られましたが、その筏流し・材木流通を守護するとされる神社がこのように多く分布している例は、安曇川流域の他にはありません。

また、このシコブチ神社の立地にも、面白い特徴がみられます。大川(針畑川や安曇川本流などの大きな川)と谷川の合流点に設けられたドバ(またはコバ)と呼ばれる木材加工の作業場など、筏流しや山仕事に関わる場所の近くに鎮座している場合が多くみられるのです。安曇川を抱く川々で育った木々は、シコブチの神々に見守られながら、筏となって川を流れて運ばれる、まさに神さまに見守られた木材であるといえるのです。



## リバーマップの作成にあたって

### 1. 作成の目的

河川は生活用水や産業用水の供給のために利用されますが、かつては物資の輸送路であったり、食用魚類の生産地(繁殖地)として、様々な生命を維持する役割を果たしてきました。しかし、近年は河川の利用範囲が狭くなったことに比例して、人々がその存在を意識することが少なくなって、大切さが忘れられつつあります。このリバーマップは、多くの人々が安曇川の歴史を後世に伝えることの意義を理解し、河川のもつ重要性を再認識しようとする動機づけの媒体となることを願って作成しました。多様な利活用をしていただけるよう願っています。

### 2. 安曇川的重要性

琵琶湖へ流入する約115本の一級河川のうち、安曇川の流量は毎秒17tほどで、2位の姉川の毎秒10tを大きく上回って、県内ダントツの1位です。主な理由としては、広大な森林原野がもつ保水能力が大きいことと、冬期の積雪量が多いという流域の自然環境にあります。朽木地区に限ってみても、1か月に平均して160.8mmの雨量があります。また、毎年の最高積雪を過去40年間で平均してみると、中流域で0.72m、上流域では1.65mに達します。川の源流を求める場合、水量の多い川をさかのぼるのが最も合理的な方法といえます。例えば、大浜湾に注ぐ淀川の場合、宇治川・瀬田川・琵琶湖・安曇川・針畑川の選択が妥当であり、源流は朽木生杉の地蔵峠付近となりますが、ここから最寄り原発まではわずか20数kmの至近距離にあります。琵琶湖は「近畿1450万人の水ガメ」といわれ、滋賀県では「マザーレイクびわこ」を、高島市では「琵琶湖源流の郷たかしま」を標語にして、その水質保全を訴えています。したがって、安曇川および流域の森林をいかにして健全に保つかが今日の課題となっています。

筏乗りたちは、難所を乗りきるために色々な工夫をしました。イカダの航行をスムーズにするために、川の浚渫や岩石の除去をして流路を確保したり、刻々と変化する川の状態を情報交換するのに便利のように、瀬・淵・岩に名前をつけました。表の地図に掲載したのもだけでも約200ヶ所ありますが、かつてはこの数倍もあったといわれます。

### 3. イカダ流しの終幕

1200年間の長きにわたり行われてきたイカダ流しも、昭和10年代後半頃から衰退期を迎えます。水力発電用ダムの建設、道路整備にともなうトラック輸送や鉄道敷設による貨物輸送の発達、イカダ流しの著しい衰退を招きましたが、これに拍車をかけたのが日中戦争と太平洋戦争です。多くの若者が軍隊に召集されたために、筏の乗り手がいなくなるとともに、流路が荒廃してイカダの航行に支障をきたしました。そして、戦後間もない昭和23年(1948)、安曇川水系におけるイカダ流しは廃絶しました。

## 昭和期の林業とイカダ(筏)流し

### 1. 材木の伐採から搬出まで

安曇川流域は奈良時代以前から、柚(そま)とよばれた材木の産地として知られ、河川や琵琶湖の水運を利用して奈良や京の都へ建築用材を供給してきました。最も長く続けられた運搬手段としてはイカダによる流送です。立木の伐採はスギでは50~60年生、ヒノキでは80年生くらいのものが標準とされ、土用の頃に行われました。斧とノコギリを用いて切り倒した原木は、4~5mの長さに玉切りして集積され、秋まで山中で乾燥させた後、ソリに乗せてキンマ(木馬)道という栈道や雪を利用して引き出したり、谷川を堰き止めて発生させた鉄砲水を利用して、本流の川岸まで搬出しました。戦後、材木の搬出方法は大きく変化し、伐採現場から張られた鉄製ワイヤーにロープウェーのように材木を吊り下げて道路際まで搬出し、トラックに積み込むなどの改良が行われました。また、昭和40年頃には斧とノコギリに代わってチェーンソーが使われるなど機械化が進みました。しかし皮肉なことに、その頃から安価な外国産の材木が大量に輸入されるようになると、国産材の価格も暴落し、安曇川流域の林業は基幹産業の座を下りることになりました。

### 2. イカダの組立てと流送

大川と谷川の合流点付近には、ドバやオオドとよばれる作業場が設けられ、そこでイカダに組立てられました。イカダの基本構造は、材木を2.5mほどの幅に横並びにしてマンサクの木で作った縄(ネソ)で結束したものを1連といい、上流域では5~6連、中流域からは8~10連を縦に連結しました。

イカダには筏乗り(筏師)が通常3人ほど乗り込んで、カジ棒(ネジキ)とコブシの木で作った棒を用いて巧みに操作しました。筏乗りは危険をともなう仕事であったため、報酬は一般の山仕事の3倍になったといわれ、昭和前期の山間地においてはあこがれの職業の一つでした。筏乗りたちは、難所を乗りきるために色々な工夫をしました。イカダの航行をスムーズにするために、川の浚渫や岩石の除去をして流路を確保したり、刻々と変化する川の状態を情報交換するのに便利のように、瀬・淵・岩に名前をつけました。表の地図に掲載したのもだけでも約200ヶ所ありますが、かつてはこの数倍もあったといわれます。

### 3. イカダ流しの終幕

1200年間の長きにわたり行われてきたイカダ流しも、昭和10年代後半頃から衰退期を迎えます。水力発電用ダムの建設、道路整備にともなうトラック輸送や鉄道敷設による貨物輸送の発達、イカダ流しの著しい衰退を招きましたが、これに拍車をかけたのが日中戦争と太平洋戦争です。多くの若者が軍隊に召集されたために、筏の乗り手がいなくなるとともに、流路が荒廃してイカダの航行に支障をきたしました。そして、戦後間もない昭和23年(1948)、安曇川水系におけるイカダ流しは廃絶しました。

